OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代内モンゴルにおける歴史の真実と認識の「真実」：ブフヘシクの死因に対する異論
Author(s)	周, 太平
Citation	阪大法学. 2015, 65(1), p. 292-302
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75417
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近代内モンゴルにおける歴史の真実と認識の「真実」

――ブフヘシクの死因に対する異論――

周　太平

近代モンゴルの著名な出版活動家で、現在の内モンゴルでは日本人に毒殺された剛毅な文化人という噂[1]でも知られるブフヘシク（Bökekesig）は、一九三〇年代の内モンゴルにおいて文学、教育、新聞、出版などの分野で重要な役割を果たした人物である。

ブフヘシク（一九〇二～一九四三、漢語名：梁玉嵐、梁萃軒）は、旧満洲国興安西省のジリム盟ナイマン旗、ベヘオソ・アイル（Beke usu ayil）村のダルト（Dalut）氏の出身である。一九一八年に故郷の小学校を卒業し、一九二二年に直隷省立の朝陽中学校を修了した。一九二三年に北京の露文大学（一九二四年法政大学と改称）法学部に入学し、一九二六年にモンゴル文学会を設立した。北京滞在中の一九二五年、彼は内モンゴル人民革命党に入った。一九三〇～三二年、北平蒙蔵学校の教師を務め、のちに世界的東洋学者となったハイシッヒ（ドイツ）、ラティモア（アメリカ）らにモンゴル語を教えた。一九三三年に満洲国興安西省の所在地である開魯に来て、省公署文教課長に就任。モンゴル文学会も北平から開魯に移転して、『オラーン・バラ』（Ulayan bars、丙寅）誌を発行した。この時期、モンゴル語の活字印刷事業が活発に進むなかで、モンゴルの文学作品や歴史に関する出版物が多く

出された。ブフヘシクが自ら執筆した『日本の教育見学日誌』も出版された。[2] さらに彼はモンゴル語と日本語の補習学校を設立するとともに、モンゴル文学会の運営を担いその発展に尽力した。一九三八年、開魯国民高等学校が設立され校長に任命された。一九四〇年興安西省実業庁長（兼文教課長）に就任するも、一九四三年に死去した。

ブフヘシクの社会的活動は、一般に北京時代と開魯時代に分けられる。一九三三年に北平から帰郷し満洲国でモンゴル人の文化啓蒙事業に尽力した開魯時代は彼の生涯における最も重要な時期であり、充実した業績を残している。

ダワオッソルの述懐によれば、「ブフヘシクは北平にいる時、モンゴル文学会を設立するとともに『オラーン・バラ』誌の発行を準備したが、実現しなかった。同誌の創刊は彼が開魯に来てようやく実現した」という。[3] ハイシッヒも、ブフヘシクは「モンゴル文化と民族の保持のために、日本人の支援を受けつつかれの出版社を、東部モンゴルで経営した」と明言している。[4]

ここで、近代の内モンゴルにとって満洲国とは何であったのかがあらためて問われているように思われる。中華民国政府の国策として進められた蒙地開墾、とりわけ張学良政権の興安屯墾によって、モンゴル人は土地を奪われ、深刻な危機に直面していた。このような状況下で勃発した「満洲事変」によって、東モンゴル人は、ようやく新しい時代を迎えることができたのである。満洲国では、さまざまなモンゴル文化啓蒙政策が実施された。すなわちモンゴル人居住地域である興安振興の一環として蒙古会館、蒙民厚生会、蒙民裕生会が設立・組織され、モンゴル人のために多くの学校、病院、文化設備が作られた。当時満洲国で発行されたモンゴル語刊行物『フフ・トグ』紙によると、一九四一年から四五年までの間に興安四省をはじめとするモンゴル人地域において、各種の学校四十六校が建てられた。[5]

日本の対内モンゴル政策を否定的に捉えてきたハイシッヒ氏も、当時の状況については、「たしかに、日本人ははじめのうち、教育を受けたいというモンゴル人の願望に極めてすばやく手をうった。一九四〇年には興安東省のモンゴル人区域には千以上の小学校と一六の上級学校ができた。教師には日本人もモンゴル人もおり、五万人を越える生徒がこれらの学校で学んだ。蒙古連合政府でも、状況はほとんど同じであった」[6]と述べている。これは学校教育に関する例であるが、一九三七～三八年の『オラーン・バラ』を見ると、モンゴル文学会が日本人の支援を受けていたことは明らかである。

ブフヘシクは、一九四三年一月一三日に開魯で死去した。これは興安西省実業庁長になってから二年後のことである。享年四二歳。彼の死因については、内モンゴルの研究者が主張する「日本人に殺害された」とするのが通説である。しかし、当時の資料や関係者の回想文を見るかぎり、従来言われているような日本人による毒殺、あるいは精神的プレッシャーに起因する病死という通説は、史実に基づいた見解とは言い難い。

ブフヘシクに関する研究で、彼の死因について詳しく取り上げたのは、エルデムトとボヤントクトホの二人が執筆した『ブフヘシクと彼のモンゴル文学会』である。この著書は、次のように述べている。

われわれは、ブフヘシクが死亡した直接原因の真相を究明するために、実情に詳しい多くの年寄りの方々を訪れた。その結果、次のような二つの見方があることが分かった。一つは、病死。王家駿、ラブダンらのお年寄りの話によれば、主に自分の仕事が思うとおりに行かなくなったか、あるいは日本人に疑われてその身辺は監視されていた。加えて、生命の危険を感じたので、精神的プレッシャーがますますひどくなりアルコール中毒になってしまったという。もう一つの言い方は、日本人が酒に毒を混ぜて殺害したという。エルデニトクトホ、金長林、

ジゲムデ、ジトグルトらの話によると、彼は、日本人の宴会に参加し帰って来てから緑色の吐しゃとともに死亡した。以上の二つの見方は本質的に同じものだ。病死としても、その病根は日本人によるものだからだ。(7)

さらに同書は、何の根拠もなく、「日本人はブフヘシクに文教課長をやめさせた」、「新京に呼び出して詰問したとき、日本人はすでに彼を殺害する計画を決めていた」(8)と断言している。

これに対して、一九九七年、フフバートル氏は、ブフヘシクの死因についてのダワオッソルの回想のなかに、つぎのような叙述があることを指摘した。

彼が日本人に殺されたという噂は聞いている。しかし、私はそうではないと思う。というのは、彼が死ぬ前、私はその年に開魯へ彼を見舞いに行ったことがある。彼は毎日ほとんど食事をとらず、酒ばかり飲んでいた。彼はアルコール中毒で死んだのだ。奥さんは私にこう言った「主人は食事をしてくれない。何日も食事をしていない。酒ばかり飲んでいる」と。慢性アルコール中毒だったのだ。日本人に殺されたという嘘は「以訛傳訛」[間違いが次々と伝播すること]である。(9)

このダワオッソルの回想は、「日本人毒殺説」を否定している点に新たな判断が示されている。

しかし、内モンゴルの歴史学界や文学界では、この新たな提起はまったく注目されていない。テクスチョクト、王秀蘭著『モンゴル語紙誌史概説』(大学教科書、一九九九年)、Na.アルタンシャ著『モンゴル文化名人録』(一九九八年)などでは相変わらず「日本人に殺害された」と強調されている。

日本人殺害説には有力な根拠は一つもなく、作為的な判断があることを指摘しなければならない。また一部の研究は「急死した」と述べているが、これも誤りである。[10] もっと具体的な資料の検討を通じた確実な実証が要求されるが、これらの誤った話は、次から次と伝わって定説のようになっている。実際に確認できる事実からは、これらの説に矛盾する部分が非常に多いことは明らかである。すなわち、

▲ブフヘシクは一文化人であり、軍部や政界に関与する地位もなく、殺害される対象になることは考えられない。

▲赤化運動や独立運動を起こす動きもなく、日本軍に疑われて新京に召還され詰問されたというのは不自然である。

▲当時の資料を見ると、「急死」ではなく、アルコール中毒が深刻となり、それが少なくとも一年間続いていた。

▲エルデムトらが言及する王家騄は、ブフヘシクと同齢・同郷で、共に北京で修業時代を過ごし、患難をともにした。この王氏の回想（未刊手稿）と『奈曼旗文史資料』（一九八六年）に掲載された「我所知道的布和格什格」のどちらにも「不正常死亡」とか「日本人による毒殺」という内容の記述はない。逆に、ブフヘシクが主宰するモンゴル文学会には多くの日本人も入会し、ブフヘシク自身も流暢な日本語が話せたという記述がある。

▲生涯にわたりブフヘシクと親友関係にあったダワオッソルの回想も、死因に疑問を感じたとか、日本人と何か微妙な関係があったとか述べられていない。のちに、「毒殺説」や「急死説」に対して、同氏は「事実ではない」と断言している。

▲ロルゴルジャブ死後（一九四一年）、王家騄は、ブフヘシクは仕事がうまくいかず、結果精神異常に陥り、日常的に病気休暇をとり自宅での飲酒によりアルコール中毒になった、体調が悪化し治療の効果がなくついに病

死したと、回想する。さらに王氏によると、モンゴル文学会の財産を処理するようにブフヘシクは彼に遺言を残した。

ブフヘシクは反日的な行動や言論もせず、逆に日本について専論、旅行記を書いて、日本社会や日本文化の優れているところを紹介していた。また、死後、『フフ・トグ』、『オラーン・バラ』など当時の新聞記事や追悼文を検討しても、死因に疑問を呈する表現はまったく見つからない。従って、虚偽の「真実」にもとづくいわゆる「死因の究明」とは、戦後内モンゴル人によって創作されたものであると言わざるをえない。

いわゆる「日本人毒殺説」は、エルデニトクトホによることが大きい。彼は「ブフヘシグもロルゴルジャブ(11)と同様、日本人の宴会に赴いて酒を飲み、帰ってきてからその晩に緑の液体を吐き出して亡くなった」と言い、またブレンジャルガル(12)もわけがわからず急死したと、日本人毒殺説を展開した(13)。

なぜ、このような神話や作り話が生まれたのか。ブフヘシクの死だけではなく、ヘシンゲ(14)の失明、メルセー(15)、ロルゴルジャブ、テムゲト(16)、フシンガ(17)、バヤンナムル(18)らの死にも、このような作為をほどこされたものが少なくない。こうして、テムゲトも、ロルゴルジャブも、ブフヘシクも、ブレンジャルガルもすべて、日本人の宴会に招待されて酒を飲み帰宅して死んだのだとか、日本人が「鴻門の会」を行ったとか主張する。そこでは、日本の侵略を強調することが前提とされている。このように戦前の内モンゴルについては、歪曲された歴史が少なくない。それはある種の歴史叙述の常套的なやりかたと密接に関係するが、このような神話や作為が、戦後の内モンゴル人の歴史認識にどのような影響を及ぼしたのかは、再考を要する問題である。

戦後、内モンゴル人は確かに日本を敵として認識せざるをえない状況に追いこまれた。この認識は動かしえない

ものであり、それにもとづいて「真実」がつくられた。とは言え、それは歴史的事実とは合致しない。すなわち、歴史の真実ではない。

歴史研究の視点から考えると、近代内モンゴルは日本の影響を抜きにしては語れない。二〇世紀はじめごろからモンゴルは日本と深い関わりを持つようになり、とくに内モンゴル地域の動向は日本と密接に連動するようになっていった。すなわち、すでに近代化が進んでいた日本は大陸進出を強め、内モンゴルの近代化に大きくかかわった。モンゴル独立軍の編成や近代教育、生産技術の普及などインフラの整備によって、満洲国は、わずか一四年間で「貧・病・愚・乱」状態にあった封建的な社会を近代社会へと改造した。これは歴史的事実である。

内モンゴルは満洲国時代に、日本語とロシア語、それに中国語といった外国語をマスターし、近代的な思想に覚醒した知識人が何万人も誕生し、人口の比率で見れば一流の技術者の数も中国本土より多い[19]。

しかし、満洲国の崩壊によって情勢は激変し、モンゴル人たちが近現代において構築してきた歴史の連続がたち切られた。

内モンゴル人にとって、戦後は「ヤルタ密約」に翻弄されながら民族の自立を目指した歴史の一段階であった。そして、彼らの苦難な道のりを支えてきたのは、満洲国時代に経験した「民族復興の夢」であった。はじめに満洲国の官吏だったモンゴル人たちはモンゴル人民共和国と合併して統一国家をつくろうと考え、進撃してきたモンゴル軍と各地で協議した。しかし、ヤルタ協定は外モンゴルの独立を保障したにすぎなかったので、モンゴル軍は撤退せざるをえなかったのである[20]。南北モンゴル（内外モンゴル）の統一が阻まれたあと、旧満洲国興安省長ボヤンマンドを主席とする東モンゴル自治政府（一九四六年一月一九日）が成立し、また内モンゴル西部にも蒙疆政権の後身である内モンゴル人民共和国臨時政府（一九四五年九月九日）が成立した。

しかし、情勢は中共の指導下にあった雲沢（ウランフ）[21]に有利に動いた。一九四七年五月一日、雲沢を長とする内モンゴル自治区が成立すると、東モンゴル自治政府も内モンゴル人民共和国臨時政府も解体された。一九四六年以降、中共は内モンゴル騎兵軍内の動揺・瓦解を促し、また雲沢を担ぎ出すことによって自身の介入を可能にし、軍隊の権力を次第にモンゴル民族主義たちから剝奪したあと、騎兵部隊を解散させた[22]。

一方、一九四九年八月一〇日、徳王[23]を主席とする蒙古自治政府が成立したが、中国人民解放軍の攻撃を受け、一九五〇年に李守信[24]らとともに外モンゴルへの亡命を図ったが逮捕された。一九五二年に北京に引き渡され、戦犯として禁固刑を受けた。また徳王のブレーンたちは、「日本特務」の罪名で処刑された。

旧満洲国の場合は、中共の指導下で暴力的な土地改革が興安地域に行なわれ、モンゴル人の実力者たちに対日協力者や反革命、反八路軍の罪を着せて処刑した[25]。一九五四年一月、中共中央華北局は「蒙綏合併」[26]を決定、内モンゴル自治区政府が帰綏市に移転した。東モンゴル出身の政治家たちが排除され、「延安育ち」の雲家派（ウランフ一族）が実権を握ることになった。

参考文献

『フフ・トグ』（青旗紙）、満洲国首都新京青旗社。
『オラーン・バラ』（内寅誌）、満洲国興安西省開魯蒙文学会。
『偽満州国政府公報全編』、線装書局、二〇〇九年。
王家騄「我所知道的布和格什格」、『奈曼旗文史資料』第一輯、一九八六年。
王家騄未刊手稿「関於布和格什格」（一九八九年？）。
達瓦敖斯楽「布和克什格創立的蒙文学会」、『内蒙古文史資料』第二七輯、一九八七年。
達瓦敖斯楽「我的経歴見聞」、『内蒙古文史資料』第三一輯、一九八八年。

エルデニトクトホ『モンゴル族教育文献資料匯編』、内モンゴル教育出版社、一九八三年（Erdeni-toγtohu, mongγul ündüsüten-ü surγan kömöjil-ün bicig barimta, Öbür mongγul-un surgan humujil-un keblel-ün qoriy-a, 1983）。

サーラン「回想父親ロルゴルジャブ」、『貢格爾草原』総第二期、二〇〇九年（Ergiculul deki abu-Rolγarjau, gungur-ün talaa, No.2, 2009）。

ハイシッヒ著、田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』、岩波文庫、二〇〇〇年。

エルデムト、ボヤントクトホ『ブフヘシクと彼のモンゴル文学会』、内モンゴル文化出版社、一九九三年（Erdemtü, Buyantoγtaqu nayiraγulun jokiyaba, Bökekesig kiged Tegün-ü Mongγul Udq-a-yin Surγal-un Qural, Öbür mongγul-un soyol-un keblel-ün qoriy-a, 1993）。

Na. アルタンシャ著『モンゴル文化名人録』、内モンゴル人民出版社、一九九八年（Na.Altansa: Öb soyol-un örlög darqad, Öbür mongγul-un arad -in keblel-ün qoriy-a, 1998）。

テクスチョクト、王秀蘭著『モンゴル語紙誌史概説』、内モンゴル大学出版社、一九九九年（Tegüscoytü, Wang xiu lan, Mongγul sonin setgül-ün teüke-in toimo, Öbür mongγul-un yeke surγaγuli-un keblel-ün qoriy-a, 1999）。

ナランゲレル「中共による内モンゴル騎兵部隊の解散までの軌跡：モンゴル騎兵チベット鎮圧の知られざる実像を求めて」、『日本とモンゴル』第四九巻第一号（総一一九号）、二〇一四年。

フフバートル：「植民地のことば：日本語がモンゴル語に与えた影響―『満州国』におけるモンゴル語近代語彙の形成と淘汰」、『和光大学人間学部紀要』第二号、一九九七年。

Ba. スヘー『ブフヘシクと「オラーン・バラ」紙研究』、内モンゴル文化出版社、二〇〇三年（Ba.Suke. Bökekesig kiged "ulagan bars" setgül-ün sudulul, Öbür mongγul-un soyol-un keblel-ün qoriy-a, 2003）。

楊海英『中国とモンゴルのはざまで』、岩波書店、二〇一三年。

克・莫日根『克興額―一個科爾沁蒙古人』、内蒙古教育出版社、二〇〇一年。

宮脇淳子『世界史のなかの満洲帝国と日本』、WAC BUNKO、二〇一〇年。

注

（1）筆者は、二〇一〇年一〇月、内モンゴル大学のモンゴル族出身の院生を対象に「ブフヘシクとはどんな人物か」というアンケート調査をおこなった。これに対して、ほとんどの人が「戦前日本人により毒殺されたモンゴル民族主義者、進歩的文化人」と答えた。

（2）さらに『日本の宗教見学』も出版したとも言われるが、確認されていない。

（3）達瓦敖斯楽「布和克什格創立的蒙文学会」『内蒙古文史資料』第二七輯、一九八七年、二〇九頁。

（4）ハイシッヒ（田中克彦訳）『モンゴルの歴史と文化』、岩波文庫、二〇〇〇年、三四〇頁。

（5）『フフ・トグ』（青旗）の記事によれば、一九四一年八校、四二年二十校、四三年十校、四四年六校、四五年二校が建てられた。

（6）ハイシッヒ『モンゴルの歴史と文化』、三二九頁。

（7）Erdemtü, Buyantoytaqu nayirayulun jokiyaba 1993, Bökekesig kiged Tegün-ü Mongyul Udq-a-yin Suryal-un Qural, Öbür mongyul-un soyul-un keblel-ün goriy-a, pp.94-95.

（8）Erdemtü, p.93.

（9）フフバートル「植民地のことば：日本語がモンゴル語に与えた影響―『満州国』におけるモンゴル語近代語彙の形成と淘汰」『和光大学人間学部紀要』、第二号、一九九七年。

（10）Wang Mantuya γullun nayirayulun, Mongyul -un teuke-un toil, Öbür mongyul-un arad -in keblel-ün goriy-a,1999; Ba.Geleltu tailburilegsen, mongyul jokiyal-un onol uguleku-in ub sugulte, 2003などを参照されたい。

（11）内モンゴル・ケシクテン旗出身の政治家で満州国の官吏。実業家、対日協力者。

（12）満洲国時代のモンゴル人有力者。

（13）Erdeni-toytohu, mongyul ündüsüten-ü suryan kömöjil-ün bicig barimta, Öbür mongyul-un surgan humujil-un keblel-ün goriy-a .1983. p.303. 同書は、エルデニトクトホの文集の一巻として再版された（内モンゴル文化出版社、二〇一〇年）。

（14）満洲国時代のモンゴル文学・教育・出版などの分野で重要な役割を果たした。

（15）一九二〇年代の内モンゴルにおける民族独立運動の指導者。

(16) 近代モンゴルの著名な出版活動家。モンゴル文字の活版印刷技術を完成した。
(17) 満洲国時代のモンゴル人有力者。
(18) 満洲国時代のモンゴル人有力者。
(19) 楊海英『中国とモンゴルのはざまで』、岩波書店、二〇一三年、九八頁。
(20) 宮脇淳子『世界史のなかの満洲帝国と日本』、WAC BUNKO、二〇一〇年、二七二頁。
(21) 内モンゴル西部トメト旗出身のモンゴル人（一九〇六～一九八八）。戦後、東モンゴル自治政府と内モンゴル人民共和国臨時政府を解体した共産党員。中国共産党の協力のもと、内モンゴル自治区主席となった。
(22) ナランゲレル「中共による内モンゴル騎兵部隊の解散までの軌跡―モンゴル騎兵チベット鎮圧の知られざる実像を求めて」、『日本とモンゴル』第四九巻第一号（総一二九号）、二〇一四年。
(23) 内モンゴル・チャハル部生まれ（一九〇二～一九六六）。本名はドムチョクドンロブ。近代内モンゴル独立運動の首唱者・推進者。対日協力者。
(24) 内モンゴル・ゾスト盟トメト右旗生まれ（一八九二～一九七〇）。関東軍の協力のもと、蒙古軍総司令や蒙古聯盟自治政府副主席などを歴任した。対日協力者。
(25) 興安盟档案館、旧〈内〉一二七案巻、一九五八年付、二八頁。
(26) モンゴル人地域と漢人人口が絶対的多数を占める綏遠省とを合併した。このことは、内モンゴル全体において漢人がモンゴル人を凌駕することを意味していた。